

シノドスへの歩み 第一回

東京教区の皆さん、こんにちは。教区のシノドス担当者に任命されている小西広志神父です。

シノドス（世界代表司教会議）第十六回通常総会がすでに本年、2021年10月10日の開会のミサで召集されていますが、再来年、2023年の本会議に向けてのプロセスが始まりました。

東京教区としてどのような歩みを行うのかについて少し皆さんに分かち合いたいと思います。

シノドス（世界代表司教会議）第十六回通常総会は、これまでとは違って教会全体で一つの方向に向かって歩みながら、教会の奉仕者のみならず、信徒、さらには他教会と他宗教の方々の意見を集約するような形で開催されます。

・三つの段階

およそ二年間におよぶ「歩み」を経て、シノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会が行われます。この「歩み」には三つの段階があります。第一の段階は教区での取り組み、第二に各大陸での取り組み、そして教会全体での取り組みです。第一段階と第二段階ではバチカンにあるシノドス事務局より提示された10の設問からなる「提題と解説」に答えることを試みます。そして、世界中から寄せられた意見を集約しながら「作業文書」を2回作成し、第三段階では代表となった司教さまたちによる全体会議が行われる予定です。こうして、今回のシノドス（世界代表司教会議）第16通常総会は、単なる教皇さまと司教さまたちだけの会議ではなく、神の民であるキリスト信者全体が関わるプロセスを経て実行されるのです。

・三つの動詞

多くの人々がこの「歩み」に関わることとなります。すでにロゴマークが発表されていますが、大人も子どもも、身体の不自由な方も高齢者も、聖職者も修道者も、教会に集うたくさんの人々が一緒になって歩み続けるのです。この「歩み」は天の御父へと向かうものです。この「歩み」を導いてくださるのは主イエス・キリストです。そして、聖霊が「歩み」の中で絶えず助けてくださいます。ですから三位一体の神とともにある「歩み」と言えるでしょう。ここでは、三つの動詞が大切となります。「参加する」、「聴く」、「識別する」。教会は人々に「参加する」ようにとうながさなければなりません。そのうながしに応じて人は、信者であれ未信者であれ、積極的に「歩み」に「参加」するので

す。教会は人々の声に耳を傾けて「聴く」ようにと神から招かれています。また人は隣人の声なき声に真摯に耳を傾けなければならないのです。耳を傾けあうところに「交わり」が生まれるからです。そして教会は、自らがどこに向かっているかを反省的に「識別する」必要があります。混迷する現代社会にあって、教会の果たす役割と務めを知らなければなりません。そして、数々の情報に翻弄され真実を得ることが難しくなっている現代社会を生きる人々もまた生きる方向をしっかりと見極めていく行かなければならないのです。

・東京教区の取り組み

わたしたちカトリック東京大司教区は2020年に宣教司牧方針を策定しました。多くの方々のご意見と提言が反映された宣教司牧方針です。そこで強調されているのは「宣教する共同体」、「交わりの共同体」、「すべてのいのちを大切にする共同体」です。コロナ禍での発表でしたから、教区全体でこれをより深めていく機会が得られていません。しかし、いくつかの取り組みは実行に移されています。わたしたちの教区は白柳枢機卿さま、岡田大司教さまのころから「共に歩む」教会を目指してきました。そして今回の宣教司牧方針でさらにこの点が明らかになっていると考えています。ですので、シノドス（世界代表司教会議）第16通常総会への「歩み」のプロセスでわたしたちのこれまでの生き方の実りであり、これからのあり方の指針となる宣教司牧方針を大切にしていきたいと思えます。新型コロナウイルスによる感染症の拡大のため、これまでのような取り組みが難しくなっています。現実には「集う」ことが困難となっているからです。同時、社会はさらに疲弊し、人と人とをつなぐ信頼関係は薄らぎつつあります。このような現状でシノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会への教区の取り組みは制限されます。そこで、動画配信などを中心に「歩み」を実行していきたいと考えています。教区の中に多くの「共に歩む」姿が見られます。それらを皆さんと動画を通して分かち合っていきます。個人でも、あるいは小グループでも動画を活用していただきたいと思えます。「参加する」、「聴く」、「識別する」の視点から動画をご覧ください。

いつまでコロナ禍はつづくのか誰も分かりません。しかし、この危機の時を過ごした結果、わたしたち東京教区の司祭、修道者、信徒は一つにまとまったという実感を得たいものです。そしてそれぞれの小教区共同体、信仰共同体のあり方は当然のごとく変わらなければならなくなるでしょう。今は大きな変革の時なのだと思います。そんな恵みの時に「共に歩む」ことができることに感謝していきたいものです。